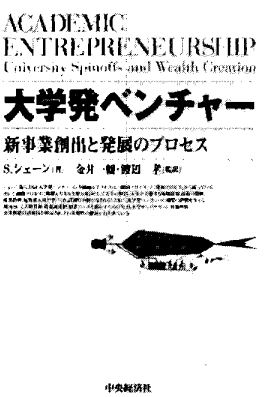


# 「大学発ベンチャー　新事業創出と発展のプロセス」

■S. シェーン　著
■金井一頼・渡辺孝　監訳
■中央経済社

**評者**
一橋大学大学院経済学研究科助教授
岡室　博之

経済活力の源泉として企業の新規開業に期待が寄せられる中で、大学発ベンチャーが注目を集めている。経済産業省が2001年春に「大学発ベンチャー1,000社創出計画」（平沼プラン）を発表した後、大学発ベンチャーの設立数は順調に増加し、2005年３月に目標を超える1,112社に達した。2004年版中小企業白書でも、大学発ベンチャーが大きく取り上げられた。しかし、大学発ベンチャーは日本ではまだきわめて新しい存在と考えられており、大学発ベンチャーに関する専門的な研究はまだほとんど存在しない。そのような「アーリーステージ」においてこの本が出版されたことを、評者は誠に喜ばしく思う。

実は、大学発ベンチャーの「本場」アメリカでも、バイ・ドール法から25年を経てなお、大学発ベンチャーに関する知識は断片的であり、よく分からないことが多い。そこで、大学発ベンチャーに関する知識を総合し、いくつかの論点から体系的に整理・検証することが、原書である Scott Shane, *Academic Entrepreneurship: University Spinoffs and Wealth Creation*, Edward Elgar, 2004の目的である（ただし原書の一部は邦訳では割愛されている）。著者は米国ケースウェスタンリザーブ大学のビジネススクールで企業家研究を担当する気鋭の経済・経営学者であり、ベンチャー、新規開業、新事業創出に関する研究で注目を集めている。本書は学術的な専門書ではあるが、研究者だけでなく企業家・投資家・政策担当者など幅広い読者に読まれることを意識して書かれている。著者は大規模サンプルを用いた計量分析を得意とするが、大学発ベンチャー創業者への多くのインタビューからの引用を、さまざまな事例研究や計量分析の結果とうまく組み合わせて、バランスの取れた論述を行っている。読んでいて面白く、理解しやすい。翻訳には監訳者の他に８名の専門研究者が関わっているが、訳文は十分にこなれていて読みやすく、文体も統一されている。

本書の主な論点は、なぜ大学発ベンチャーが重要なのか（第２章）、大学によってベンチャー企業設立の比率に違いがあるのはなぜか（第３章）、どのようなタイプの技術が大学発ベンチャーの設立につながりやすいのか（第４章）、どのような産業で、なぜ大学発ベンチャーの設立が多いのか（第５章）、どのようなタイプの人が大学発ベンチャーを創業するのか（第６章）、大学における発明がどのようにベンチャーの設立につながるのか（第７章）、大学発ベンチャーが創業後にどのように技術開発と市場開拓を行うのか（第８章）、創業者がどのように資金を調達するのか（第９章）、どのような大学発ベンチャーが成功しやすいのか（第10章）、そして大学発ベンチャー設立にはどのようなマイナスの側面があるか（第11章）、である。

結論（第12章）は、本書の全体的な特徴、目的と主な内容をまとめるだけでなく、14頁にわたって、それぞれの章について新たな疑問や今後の研究課題を提起している。この部分は、大学発ベンチャーに関心を持つ研究者に大きな知的刺激を与える。今後の研究課題をこれほど体系的・網羅的に論じた専門書は、他に類を見ない。「本書がよき刺激剤となって、多くの研究者の方々が、大学発ベンチャーという重要な現象の究明にともに取り組んでくださることを願ってやまない」という著者の最後のことばには、評者も強くうなずける。

本書の内容は、発展期を迎えた日本の大学発ベンチャーにさまざまな形で関与する人々に対して重要な示唆を与えるだろう。大学の仕組みが日米間で未だに大きく異なる以上、大学発ベンチャーの特性や行動にも日米間でさまざまな違いがあると考えられる。大学発ベンチャーの研究の明確な枠組みが本書によって与えられた以上、日本の大学発ベンチャーの創出・発展のプロセスおよび成果の要因が欧米とどのように異なるのかを明らかにすることが、我々にとって重要な課題である。